

くすのき タイムズ

KUSUNOKI TIMES



特 | 集

スペシャルインタビュー

神戸大学医学部附属病院
助教

魚住 洋一 先生

神戸大学医学部附属病院
教授、診療科長

篠山 隆司 先生

神戸大学医学部附属病院
助教

藤本 陽介 先生

脳神経外科

～確かな技術で回復のその先を見据えた医療～

CONTENTS

特集『スペシャルインタビュー』… 2・3

TOPICS『配送サービスロボット「FORRO（フォーロ）」』…4

健康手帳『肺がん治療について』…5

健康レシピ『冷製豆乳担々麺』…6

お知らせ『患者支援センターHP リニューアル』…7

当院のキャッチコピーは「神戸から世界へ。命を支える知と技術。」です。
今後の広報活動に活用してまいりますので、ご期待ください。



神戸大学医学部附属病院
Kobe University Hospital
～神戸から世界へ。命を支える知と技術。～

脳神経外科

～確かな技術で回復のその先を見据えた医療～



神戸大学医学部附属病院
助教

魚住 洋一 先生

神戸大学医学部附属病院
教授、診療科長

篠山 隆司 先生

神戸大学医学部附属病院
助教

藤本 陽介 先生

「その人らしく生きる」を支える脳神経外科

まず、脳神経外科が地域で担う役割について教えてください。

魚住: 大学病院として、高度先進医療を担うのが役割だと思います。脳卒中などは地域の病院でも対応できますが、大学病院では、より専門性が高く、多くの診療科との連携が必要な病気を診ることが多いです。

篠山: 脳疾患の治療は、脳外科だけでは完結しません。耳鼻咽喉・頭頸部外科、形成外科、眼科、病理診断科、放射線腫瘍科、脳神経内科、小児科、精神科神経科、リハビリテーション科など、本当にいろいろな診療科と協力して診療していきます。多くの診療科がいくつもの専門性を持っているので、大学病院だからこそ実現できる部分があると思います。

魚住: 神戸大学は特に、他科との垣根が低い。「ちょっと耳鼻科の先生に診てもらおう」とか、「形成外科の先生にも一緒に入ってもらおう」がすぐできる。そこは患者さんにとって大きなメリットだと思います。

大学病院というと、縦割りのイメージを持っている方も多いと思います。

藤本: そういったイメージをお持ちの方は多いのですが、例え

ばてんかんの場合、脳外科、脳神経内科、小児科、精神科で定期的にカンファレンスを行います。「この患者さんには何が一番いいのか」を皆で議論しているんですよ。

魚住: 一つの診療科だけで完結させるのではなく、多職種、多分野で患者さんを支える文化があります。それに大学病院には人材も設備も集約されているので、「できません」とは言えないですよ。

篠山: 我々のもとには、他の病院から「大学に相談してください」と紹介された患者さんが大勢いらっしゃいます。だからこそ、「日本トップレベル、そして世界にも通用する治療を提供する」と自信をもって言える体制を目指さなくてはいいけないと考えています。

特に大学病院らしい治療として、どんなものがありますか？

篠山: 脳腫瘍に対する覚醒下手術ですね。これは、手術の途中で患者さんに一度目を覚ましていただいて、会話をしたり、手足を動かしてもらったりしながら進める手術です。例えば、脳腫瘍が「言葉」や「運動」を司る重要な場所の近くにある場合、腫瘍をたくさん取ることを優先すると、術後に言葉が出にくくなったり、麻痺が残ったりする可能性があります。そこで覚醒下手術では、「ここを切ると言葉に影響が出る」「ここは安全に摘出できる」というのを、患者さんとやり取りしながらリアルタイムで確認して

特集

SPECIAL Interview

スペシャル インタビュー

神戸大学医学部附属病院
教授、診療科長

篠山 隆司 先生

1994年に神戸大学医学部を卒業後、神戸大学医学部附属病院、公立豊岡病院、兵庫県立成人病センター、高砂市民病院、三田市民病院などで脳神経外科診療に従事。神戸大学大学院医学研究科博士課程修了後、同大学附属病院脳神経外科の医員、助手、講師を経て、2020年より神戸大学大学院医学研究科脳神経外科学分野教授、脳神経外科診療科長。脳腫瘍や遺伝子診断を専門としている。

神戸大学医学部附属病院
助教

魚住 洋一 先生

1999年に防衛医科大学校を卒業。ドイツ・ハイデルベルク大学脳神経外科へ留学し、脳神経外科領域の研鑽を積む。帰国後は陸上自衛隊 第10師団医務官として東日本大震災の災害派遣を経験。現在は神戸大学医学部附属病院で、良性脳腫瘍（特に嗅神経腫瘍）のほか三叉神経痛、顔面痙攣等の機能性疾患の治療に携わる。日本ラグビー協会のアンチドーピング委員も務める。

神戸大学医学部附属病院
助教

藤本 陽介 先生

1999年に神戸大学医学部を卒業後、同大学大学院を経て神戸大学脳神経外科に入局。てんかん、定位機能神経外科を専門として研鑽を積み、神戸大学てんかんセンターや兵庫県立丹波医療センターなどの関連病院でも、てんかんの外科的治療や外来診療に携わる。現在は神戸大学医学部附属病院脳神経外科助教として、市民公開講座などで講師も務め、患者や家族への啓発活動にも尽力している。



手術を行います。

藤本: 術中に“しりとり”をしたり、絵の名前を答えてもらったりしながら進めることもあります。覚醒下手術は、脳外科医だけでは絶対にできません。麻酔科の先生、言語聴覚士、リハビリスタッフ、看護師など、本当に多くの職種が関わります。術前には何度もカンファレンスをして、「この患者さんにとって何を守るべきか」を皆で考えるんです。仕事で言葉をたくさん使う方なのか、細かい手作業が必要な方なのかによって、重視する機能も変わってきますから。

篠山: 覚醒下手術は、単に“高度な技術”というだけでなく、“患者さん一人ひとりに合わせた医療”でもあります。病気を治すだけではなく、“その後もその人らしく生活できるか”を考えながら治療できるのが、我々の強みです。

てんかんや三叉神経痛、顔面痙攣の治療にも注力されているそうですね。

藤本: “命に直結するわけではないけれど、生活の質を大きく左右する病気”にも積極的に取り組んでいます。例えばてんかんは、単に発作を止めるだけではなく、「学校や仕事に復帰できるか」「安心して日常生活を送れるか」という部分まで考えながら治療を進めています。神戸大学では2022年にてんかんセンターが開設されたことで、より専門的な診療体制が整ってきました。

魚住: 治療は外科的治療が基本ですが、内科的治療もできますので、常に「本当に手術が必要なのか」を多角的に判断するよう努

めています。開頭手術は日常生活を大幅に改善する可能性がありますが、リスクもあります。ですから、「症状はあるけれど、今は薬で様子を見たい」という方に無理に手術を勧めることはありません。

篠山: “手術をした方が幸せになれるのか”をすごく大事にしているのが、我々の特徴です。苦しんでいる方がいれば、一度相談していただければと思います。

世界で戦える「最後の砦」を目指す

最後に、今後の展望についても聞かせてください。

魚住: 脳外科の技術は、一朝一夕で身につくものではありません。先輩の手術を見て学び、少しずつ経験を積み重ねながら、自分ができるようになっていく。そして次の世代にまた伝えていく。その継承がすごく大事だと考えています。

藤本: 技術を磨くと同時に、患者さんから「この先生に診てもらえてよかった」と感謝されることも、すごく大事だと思っています。患者さんへの説明の仕方や向き合い方も含めて、若い先生たちには伝えていきたいです。

篠山: 大学病院には、本当に幅広い症例が集まります。若手にとってはそれだけ多くの経験を積める環境でもあります。「世界レベルで戦える脳外科医を育てたい」という思いはありますが、同時に、“患者さんに信頼される医師”を育てたいですね。その上で、地域の皆さんの「最後の砦」でありたいと思います。



配送サービスロボット「FORRO(フォーロ)」が仲間に加わりました!

このたび神戸大学医学部附属病院では、院内で検体や薬剤などを運ぶ配送サービスロボット「FORRO(フォーロ)」の稼働を開始しました。

FORROは病院内を自律的に走行し、配送物を安全に各部署へ届けるロボットです。人や医療機器が行き交う病院の環境に配慮しながら、エレベータも利用してフロア間を移動します。

近年医療現場では人手不足や業務の高度化が大きな課題となっています。当院においても診療や看護、検査など医療スタッフ一人ひとりに求められる役割は年々増えています。そのような中で、限られた人員をどのように生かし、患者さんにより良い医療を届けていくかが重要になっています。

FORROの導入は、そうした課題への取り組みの一つです。これまで医療スタッフが担っていた院内配送業務の一部をロボットが担うことで、移動や運搬にかかる時間や負担の軽減が期待されます。生まれた時間を患者さんとの対話や、より専門性の高い業務に充てることで医療の質の向上につなげていきたいと考えています。



FORROは、医療スタッフの「代わり」ではなく、「ともに働く仲間」として設計されています。院内では人の動きを感知しながら安全に走行するため、患者さんやスタッフの皆さんにも安心していただける存在です。今後は運用状況を確認しながら、安全性と利便性の両立を大切に活用の幅を広げていきます。

神戸大学医学部附属病院では医療DX(デジタルトランスフォーメーション)を通じて、働きやすい医療環境づくりと、患者さん一人ひとりに寄り添った医療の実現を目指しています。FORROとともにこれからも質の高い医療を安定して提供できる病院づくりに取り組んでまいります。

肺がん治療について

日本における死因の第1位は「がん」であり、がんによる死亡率は今も増加が続いています。肺がんは男性のがんの死亡原因の第1位、女性のがんの死亡原因の第2位となっています。肺がんの治療では、Shared Decision Making(共同意思決定)といい、医師と患者さんが最新の科学的根拠に基づいた情報を共有し、患者さんの希望や価値観を尊重しながら、納得のいく治療法をともに選択するプロセスを取っています。従来のような単なる同意ではなく、チームとして最適な医療を目指す手法です。具体的な肺がんの治療法は以下のような4本の柱からなり、早期であれば手術の対象となりますが、薬物治療が中心となります。

- 手術
- 放射線治療
- 化学療法、分子標的薬
- 免疫療法

現在、手術に薬物治療を組み合わせることで、生存率がさらに改善しています。また、比較的早い段階から、がんによる苦痛を取り除くための緩和医療を行うことも特徴です。

がん細胞の中には、強力ながん化遺伝子異常を持っているものがあり、正常な細胞をがん細胞へと変化させています。その遺伝子異常を治療前の検査によって明らかにし、その特徴的な異常だけを治療標的にしたお薬を分子標的薬と言います。このがん化遺伝子異常に対する検査の進歩と遺伝子異常の発見が分子標的薬の開発を促進し、この特徴を持ったがんの患者さんの生存率を飛躍的に改善しています。

また、2018年にノーベル生理学・医学賞を受賞された本庶佑先生らの研究によって、がん細胞が人間の体が持っている免疫から逃げる仕組みが明らかになり、その仕組みを解除することで、自分の免疫力でがん細胞をやっつける治療が生まれました。これが、免疫療法として現在標準的な治療法に組み入れられ、効果が出る人では長期にわたってがんを抑えておくことが可能になりました。

がんに向き合うことは決して簡単なことではありませんが、昔のように体を痛めつけながら戦うという時代とは様相が変わってきています。当院の呼吸器内科では患者さんと最善の治療を相談しながら、チームで一丸となって肺がんの治療にあたっています。

文責:呼吸器内科 永野 達也





HEALTHY RECIPE

健康レシピ

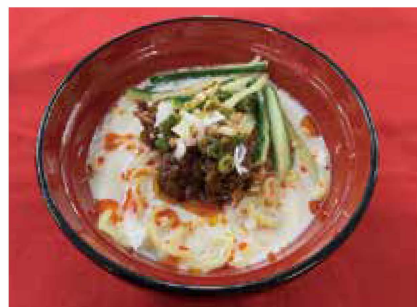
夏のスタミナメニュー

減塩料理編

冷製豆乳担々麺

梅雨が明け、いよいよ本格的な夏がやってきました。今回は、暑い夏でも食べやすい豆乳を使った冷製担々麺をご紹介します。

麺料理は塩分が多いものが多く、一般的に食塩7~10gある担々麺ですが、パンチのある肉みそや辛味を効かせてメリハリをつけることで、食塩3g未満に減塩することができます。ぜひお試しください。



※写真の器は直径14.5cm、盛り付けは1人分です。

材料(2人分)

中華麺	240g(2玉)
調整豆乳	200cc
豚ミンチ	80g
おろしにんにく	1.6g(小さじ1/3)
豆板醤	5g(小さじ1)
赤味噌	6g(小さじ1)
砂糖	10g(大さじ1強)
減塩醤油	13g(小さじ2強)
中華スープの素	1.6g(小さじ1/2)
練りごま	48g(大さじ2.5)
ピーナッツバター	10g(小さじ2弱)
きゅうり	40g
白ねぎ	20g(約10cm)
山椒	少々
<ラー油>	
ししとう	10g(2本)
白ねぎ	20g(約10cm)
ごま油	10g(大さじ1弱)
一味唐辛子	6g
山椒	4g

作り方

【下準備】

- ・きゅうりは千切りに切る。
- ・白ねぎ、ししとうはみじん切りに切る。

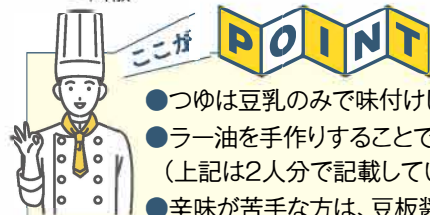
- ① Aをフライパンで炒めて肉みそを作る。
- ② 鍋にBを入れ、弱火で火にかけて約150℃まで熱する。
- ③ ②を網目の細かいざる等でこし、ラー油を作る。
- ④ 中華麺を茹でて、冷やす。
- ⑤ 器に豆乳を入れ、④の冷やした麺、①の肉みそ、きゅうり、白ねぎを盛る。
- ⑥ ③のラー油を適量(※)かけ、山椒をふりかけたら出来上がり。

※栄養量はラー油3gで計算しております。

計量の単位:大さじ1=15mL、小さじ1=5mL

栄養量(1人分)

エネルギー	690kcal
たんぱく質	27.0g
脂質	28.8g
炭水化物	73.5g
糖質	69.3g
食物繊維	4.2g
食塩相当量	2.9g



- つゆは豆乳のみで味付けしていないため、肉みそをよく混ぜてお召し上がりください。
- ラー油を手作りすることで本格的な辛さが食欲を促進してくれますが、市販のラー油でも手軽にお楽しみいただけます。(上記は2人分で記載していますが、多い量の方が作りやすくなります)
- 辛味が苦手な方は、豆板醤やラー油を減らして調節してください。

メニュー考案:エムサービス(株) 梶本 裕也、編集:栄養管理部 尾上 弘美

食事・栄養についてのご相談は、月~金曜日に予約制で行っています。医師、看護師、管理栄養士にお申し出ください。

●栄養相談に関する問い合わせ先

栄養管理部 ☎078-382-6820(直通)
受付時間 平日9:30~17:00



NOTIFICATION

お知らせ

患者支援センターHP
リニューアルしました!!



本リニューアルでは、地域医療機関・患者さん・ご家族の皆さんが、必要な情報をより分かりやすく確認できる構成といたしました。
また、スマートフォンやタブレット端末からも快適にご覧いただけるよう対応しております。

..... 主な変更点を3点紹介いたします

1 WEB紹介予約

対象診療科については、順次拡大中です!!

2 メディマップ

当院と連携した「かかりつけ医」をご自身で検索できます。「かかりつけ医」の検索はこちらから↓

3 医療連携機関登録制度

FAXでの申込のみからGoogleフォームでの申込も可能となりました。詳細はHPをご確認ください。

当院と連携している医療機関は
こちらからご覧ください。

詳しくは当院の登録医療機関検索システム「メディマップ」で検索!

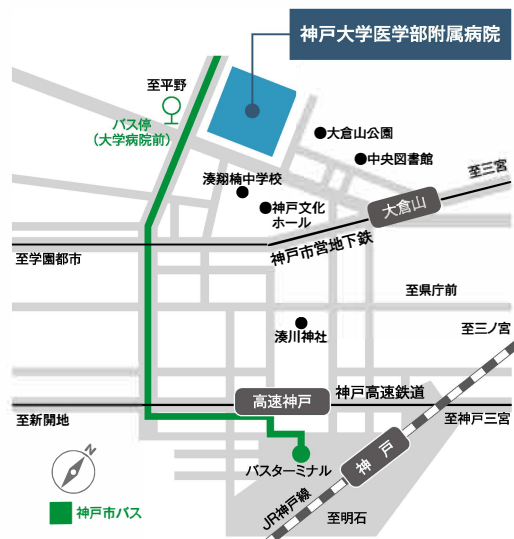
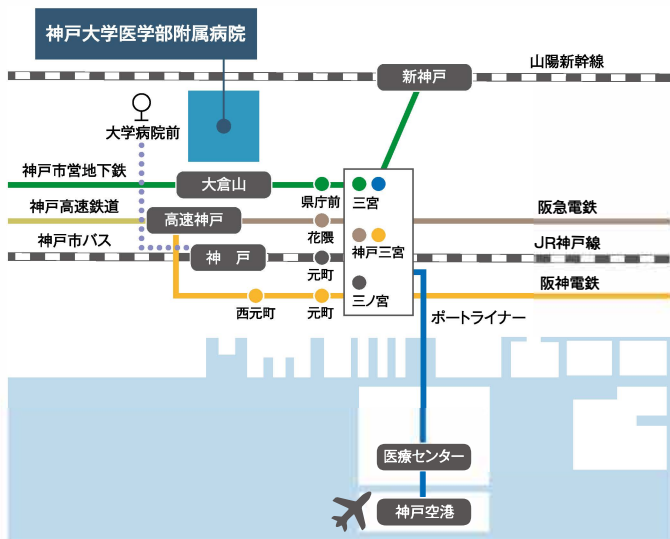
かかりつけ医を持ちましょう。まずは主治医にご相談を。



登録医療機関検索システム「メディマップ」

神戸大学医学部附属病院 | 交通アクセス

〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5-2 TEL.078-382-5111 FAX.078-382-5050
<https://www.hosp.kobe-u.ac.jp/index.html>



電車をご利用の方

- 神戸市営地下鉄「大倉山」駅下車 徒歩約5分
- JR「神戸」駅下車 徒歩約15分
- 神戸高速鉄道「高速神戸」駅下車 徒歩約15分

バスをご利用の方

- JR神戸駅前より神戸市バス 110系統もしくは112系統に乗車 約5分「大学病院前」バス停下車

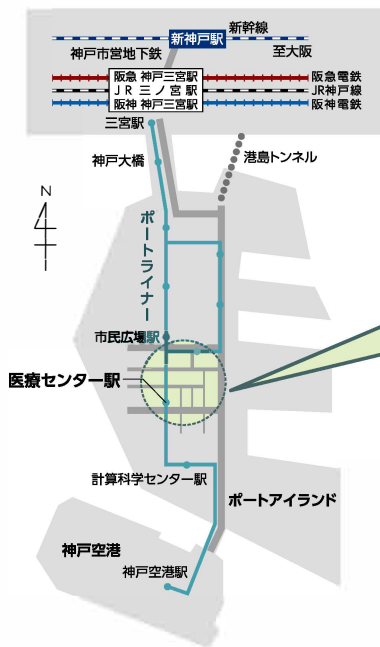
タクシーをご利用の方

- JR神戸駅前より約5分
- JR新神戸駅前より約10分

国際がん医療・研究センター | 交通アクセス

〒650-0047 神戸市中央区港島南町1丁目5-1 TEL.078-302-7015 FAX.078-302-7147
<https://www.hosp.kobe-u.ac.jp/iccrc/>

改札を出て右側のムービングウォークを直進し、
 右手の直結歩道橋より受付(2F)へ



電車をご利用の方

- 三宮駅よりポートライナー「神戸空港行」乗車約12分「医療センター駅」で下車し北へ徒歩100m
- 神戸空港駅よりポートライナー「三宮行」乗車約5分「医療センター駅」で下車し北へ徒歩100m

車をご利用の方

- 阪神高速3号線西行き「生田川」I.C.・東行き「京橋」I.C.から神戸大橋を渡りおよそ15分
- ※三宮東の港島トンネルも利用可能
- ※1階駐車場を一般利用者として有料で利用可
 最初の60分無料、以降1時間毎100円

神戸空港をご利用の方

- 「神戸空港駅」からポートライナー「三宮行」乗車約5分「医療センター駅」で下車し北へ徒歩100m

病院の基本理念

1. 患者中心の医療の実践
2. 人間性豊かな医療人の育成
3. 先進医療の開発と推進
4. 地域医療連携の強化
5. 災害救急医療の拠点活動
6. 医療を通じた国際貢献

くすのき **7** タイムズ
 vol.5
 2018 JULY
 KUSUNOKI TIMES

発行責任者：病院長 編集：病院広報委員会



神戸大学医学部附属病院
 Kobe University Hospital

～神戸から世界へ。命を支える知と技術。～

〒650-0017 神戸市中央区楠町7丁目5-2
 078-382-5111 (代表) 078-382-6243 (予約変更専用)
 月～金曜日(休診日除く) 13:00～16:30 のみ(原則、予約変更は受診日の2日前まで)